▼オピニオン：インフラテクコンから広がる社会

大学生から見たインフラテクコンの素晴らしさ。土木における学生とは何かを考えた話。

Doboku Lab１期生
茨城大学大学院 理工学研究科 都市システム工学専攻 修士１年
浅野 太我

１．インフラテクコンに一人の大学生が巻き込まれ、高専生に嫉妬する。

2020 年の夏が始まるという頃に、とある尊敬している社会人の方から自分に電話があった。その電話で「インフラテクコンという土木のアイデアコンテストを開きたい」という強い思いを聞き、そして「学生がこのようなコンテストにどんな反応を示すか実験させてほしい」という依頼を受けた。当然快諾した。気が付いたらテクコンについて、社会人の方々と議論していた。

「こんなテーマで高専生にインフラを考えてもらおうと思っているんだけど」

「どうすれば高専生にとって良いものになるだろう」

写真 1　実行委員会の様子

自分の親世代にもなろうというベテランの土木の一線の方々が、土木業界のこと、そして何より高専生という土木技術者の卵を思い、コンテストを設計・計画していた。こんなことが今まであっただろうか。私は嬉々として、実験台になりリハーサルに参加し、意見を出し、自分なりにテクコンの計画に参画していた。そして、夏の暑さが弱くなる頃には、高専生からアイデアの募集を行っていた。電話があった日から、たった 3 ヶ月程度である。そして冬が終わり春になる頃、入賞した高専生によるアイデアのプレゼンが行われ、その司会を私は担当した。その中で高専生たちをみて、私は「高専生、参加できるの羨ましいな…。」と常々思っていた。

２．高専生を見て思った、土木業界における学生という存在。

高専生への嫉妬は、各アイデアの中で、自己表現をしている高専生が多かったからだと、今振り返って思う。土木という分野は、社会基盤を扱うし、人の生命や生業に直結するほどの影響力をもつ。それ故、土木技術者の方々はものすごく真面目に、土木を語る。大学の講義でも、会社説明会でも。それはもちろん大切なことではあるが、そればかりだと学生は「自分の意見なんて土木という神聖なものの中で提案するに値しない」といって、何も論じず、何も考えず、何もしなくなってしまう。

確かに学生の意見なんて所詮、学生の意見であるのだろう。されど、学生の意見は、学生の意見である。学生とは誰だろう。学生とは、ただの人材であるかもしれないが、将来を担っている世代であり、よく勉強するように言われる世代でもあるし、新しいアイデアを求められる世代でもある。諸先輩を尊敬して真面目に土木を論じることも、自分にしかできないことを大いに発揮することも、もちろんよく学ぶことも、どれも重要で、むしろ、どれもできなければならないのである。こういった”学生”を社会人の方がインフラテクコンとして迎えてくれることはとても有難いことであるし、当たり前のことではないが、我々学生はもらった機会を最大限生かし、学生でも論じて良い、提案して良い、そんな雰囲気を少しずつ作っていく必要性がある。そんな雰囲気が当たり前になれば、10 年後の土木学生か、100 年後の土木学生か、はたまた数日後の自分が、もしかしたら新しい土木を定義しているかもしれない。

インフラテクコンがこれから末永く続けば、土木業界に良い影響を与えることは、明らかです。